

弔辞

八年前の春に、大学四年生になった君が、三村將先生の伝手で、私と高田さんが慶應で始める新しい研究室にやってきました。君にとって見るものすべてが新鮮だったのでしよう。君は、遺伝子診断でも主流固定でも何でも楽しんでいました。研究室には同年代の学生が居なかったのです、仲間同士の切磋を目的として、君を東大薬学部の池谷裕二先生の研究室へ出稽古させました。日本一の学生が本気で勉強するさまを初めて見たときには、君は衝撃を受けたことでしょう。君はその勉強会をも楽しんでいましたね。研究を楽しむという能力を持つ君は、いつの間にか電気生理実験を極め、いつの間にか英語がしゃべれるようになり、いつの間にか美しい figure を組み、いつの間にか論文が書けるようになっていた。更に、いつの間にか結婚し、いつの間にか一児の父になっていた。さりげなく、いつの間にかやるのが君だった。

でも吉田君、私は、君が、この世から、いつの間にかいなくなることを許した覚えはない。

君は美のセンスが圧倒的に高かった。そこに君の不断の努力が加わった。そして君は徹底的にデータを疑い、納得するまで繰り返した。君の最後の実験ノートには1715匹めの手術記録が残っていた。他を圧倒するのはこのことだ。美に裏打ちされたデータと、重厚な経験で勝負するスタイルを確立し、若くして君は、科学の真実に触れることが許された選ばれし研究者になった。日本一の大学院生に贈られる育志賞の受賞はそのあかしだ。私は本当に誇らしかった。

もっと君と一緒にやりたかった。もっと君と一緒に興奮したかった。君ならもっと多くの真実を明らかにしただろう。おそらく、今日、ここに参列した皆さんも、君から発せられる、真実と触れている臭いに敬意を払っていたはずだ。後輩は君を目指していた。そして君は、家族からも、友人からも、共同研究者からも、皆から愛されていた。

いつの間にか、君が戻ってくることを夢見たい。でも、夢の中で君に再会できても、君の実体が戻ることはない。しかし、君が亡くなる直前に、君が触れていた真実を、残された我々が、君の残り香をたより

にして引き釣り出す。私は真実の永遠性を信じる。そして君は真実と共に永遠に生きる。我々による真実の発見を通じて、君を復活させる。待っていてくれ。

吉田君、これまでありがとう。安らかに。

令和二年 六月十六日 田中謙二